



京
都
芸
術
劇
場
ス
レ
タ
ー

shunjuza
studio21
Newsletter

特集

琉球舞踊と組踊 春秋座特別公演

ミニ特集 ダンス作品

『星の王子さま』サンテグジュペリからの手紙』

市川猿之助・藤間勘十郎

春秋座 花形舞踊公演

2P
5P

6P
7P

T-2P
T-5P

vol.
47
2020.8



【開学30周年記念事業】

京都芸術劇場 春秋座 芸術監督プログラム

市川猿之助 藤間勘十郎 春秋座 花形舞踊公演

春秋座芸術監督・四代目市川猿之助と
宗家藤間流八世宗家・藤間勘十郎が
タッグを組む夢の企画です。かつて歴
代の猿之助と勘十郎の祖父・六世藤間
勘十郎もコンビを組み、様々な名作を
世に生み出してきました。現代の二人
が春秋座でどのような競演を魅せるか
楽しみな舞台です。また京都花街・宮
川町の三味線の名手、今藤美佐緒が舞
台に華を添えます。藤間勘十郎さん
今回の舞台にかける思いをお伺いしま
した。

2020年10月3日(土) 11:00、16:00(2回公演)
／4日(日) 11:00

会場：春秋座

出演：市川猿之助、藤間勘十郎、市川猿弥、中村鷹之資
演目：檜垣、玉兔、黒塚（～月の巻より）、悪太郎

●公演情報の詳細はスケジュール一覧（P.10）をご覧ください。

今回の公演を収録し、後日オンラインにて有料配信する予定です。
詳細は決まり次第、劇場HPにてご案内いたします。

—澤瀉屋のお家芸も並んだ素晴らしい演目ですね。『檜垣』『黒塚』『悪太郎』と、そこに『玉兔』を加えて全て「秋」に因んだ10月に相応しい情緒があります。

—そういうことでやりましょうと四代目と話したんです。こういう機会は滅多にないですからね。

—『檜垣』の老女はお家芸なので四代目がされるのかと思っておりました。

—四代目がずっと「老女をやって」と、すすめてくるんですよ（笑）。「僕が少将やるから」って（笑）。家には祖母がやった澤瀉屋とは違う形の『檜垣』が残っているんです。

—祖母という藤間紫さんですね。

—そうです。今回、資料を探していたら猿翁さんが少将、祖母が老女、母が小町を踊っている、すごい写真が出てきました。祖母も好きで何回も踊った作品なので家にとっても大事な演目です。ですからいつかはやりたいと思っていたのですが、こんなに早くできるとは思いませんでした。

—お家の流儀でやるとなると、少し雰囲気が変わりますね。

—老女なので女性がやると「女性」が強くなりますし、澤瀉屋はスペクタクルで歌舞伎味が強くなります。今回は私にとって初演なので、それらとは違う、私が今後、何回も踊れる『檜垣』を作りたいと父（梅若実玄祥）に相談して、お能の心得を聞いて、取り入れられそうなものは入れようと考えているんです。逆を言うと、お能の要素を取り入れることで素踊りにしやすくなるのかなと思います。お能は白拍子の部分が強いので、

どこかに入れられたらと考えています。それに大曲で長いですからね、今のお客様にも見やすいようにしようと思っています。

—味わい深い老婆の動きは難しいものですね。

—生半可な気持ちではできませんね。母親も70歳を過ぎてからやりましたし。それに素踊りでやるのはハードルが高いです。そういう意味でお能を取り入れることで糸口が見つかるかなと思って。今、方向性が少し見えてきたので、父も「この装束を貸してやろう」とかなんとか言っています。そういう意味では重い曲であるということを引きちんと受け止めて、澤瀉、お能、家の芸の良いところ取りをして自分なりのものを作りたいと思います。

—『檜垣』の後は中村鷹之資さんの『玉兔』で、ちょっと滑稽で愉快な踊りを楽しんでいただくと。

—鷹之資くんは何度も踊っていますし、お父さんの中村富十郎さんもよくなさっていましたね。それから三代目もご自分の会でよく踊られていましたし、祖父も好きで昔からやっていた、みんなに縁のある演目ですね。—そして四代目による『黒塚』の二景。月下における老女の踊りで、びよんぴんと跳ねる振りは初演時の二代目がロシアに行った時に観たバレエからヒントを得たといわれていますね。

—これはもう四代目も手に入れられている踊りですからね。逆に素でされるといのが珍しいぐらいで、どうやって素でされるのか楽しみです。

—この『黒塚』も四代目に「祐慶をやりたいから老婆をやってよ」と言われ続け、断っているのですが（笑）。

—僕がやらせていただくことがあるなら…と思って勉強したいと思います。

—最後は『悪太郎』ですね。四代目が悪太郎、宗家が修行者智蓮坊。二人が絡む踊りが多い曲ですね。

—『悪太郎』が大好きなんです。曲も好きで譜面がなくともサラで弾けるぐらいです。とはいえ、まさか自分が出ることもあるなんて思ってもいなかったから、あまりの膨大なセリフや掛け合いの量に今さらながら、できるのだろうか（笑）。





今回、四代目と話して、昔、NHKで二代目と三代目市川段四郎さんがおやりになった形でやろうとなったんです。四代目に最初の智蓮坊の部分を「素踊りでしたらいいと思うんだ」と言われたんです。すごく良い振りで、良い曲なんですよ。

—そして最後、悪太郎がこらしめをうけて坊主になり、念仏を唱えながら智蓮坊と鐘の叩き合いをするんですね。このテンポ感が面白いです。

二代目と三代目段四郎さんは親子なので、やはり掛け合いが面白いんですよ。最後は3拍子になり洋楽風なんです。『黒塚』のようにゆっくりではなく、『ポンポン』つという掛け合いが面白いので、どこまでできるのか。今まで縁のない作品でしたけれど、演者として勉強できるので楽しみです。

—今回、初めて素踊りをご覧になる方もいらっしゃる

と思いますが、どういうところに注目したら面白いでしょうか。

素踊りは衣裳を着けず紋付き袴で踊るので、演者は衣裳を着なくても、お婆さんやお姫様のように観えなくてはいけません。出てきた時、お客様に着物を着たおじさんだと思われてはいけない(笑)。これは本当に重要なことなんですよ。

ですが、そこで大事なのはお客様も想像力が必要だということ。これは落語とかラジオドラマと同じなんです。ここは長屋だと言われれば長屋だと思って観ますよね。なんとなくシーンを想像していただいて最初はそう見えなくても、この人はお婆さんだなと思うと、だんだんそう見えてくるんですよ、不思議と。とはいえ観えるようにしていくのが演者の腕なのですが、でも、衣裳を着るとその形にしか観えないですよ。ところが素踊りだと例えおじさんが踊っていても、美人だと言われたら「こんな感じかなあ…」と自分好みに想像することができるとは違います。そういう意味では、お客様も自由なんです。

それから役者が出てきた瞬間、猿之助さんが踊っているとすぐに分かる。白塗りをしたら誰だか分かりませんからね。鼻眞の役者がすぐに分かる。ファン目線としても素踊りっていいなと思います。こういうのは現代的な考え方ではありませんが。

そして振りの面白さが伝えやすいですね。素踊りは色のついていないデッサン画みたいなもの。演者がちゃんと踊れば、役者が誰か分からなくても面白い踊りだとお伝えすることもできます。僕は振付師でもあるの

で、面白く観てもらえるように作らないといけません。でも、そこが面白いですね。

そして役者が何を考えているか、基本が無いとか一目瞭然で分かっちゃうんです。奴、侍、お婆さん、お姫様、女中、そういう基本の形が体に入っているか試される場もあるんです。

—そういうのが観ている方にはたまらないですね。そうそう。いかに体得しているかですね。

—観ている方も想像力が刺激されるわけですね。そういった中で宗家にとって猿之助さんの踊りの魅力はどういうところにあると思われませんか。

その場に応じた見せ方、全体的な作品作りを場や相手によって変えていらっしゃる方ですね。一步引いた目線で舞台を見ていらっしゃる、そういうところも素晴らしいなと思います。計算してやるのとは違う、だけど行き当たりばったりではない。同じ『黒塚』でも相手が違うと全く違うんですね。そういう方はなかなかいらっしゃらないですね。そして基礎がちゃんとできていらっしゃるから、何をされても良い意味で歌舞伎っぽくなりますし、素踊りをして素敵ですね。

—お祖父さまの六世藤間勘十郎さんと、二代目、三代目猿之助さんとで素晴らしい作品がどんどんと生み出されてきました。それを今の時代に宗家と四代目がおやりになるのはたいへん意義があって素晴らしいことだと思います。またそれを春秋座で観られるというのは光栄ですね。10月の舞台を楽しみにしております。

※今回『悪太郎』は衣裳付けとなり、勘十郎さんは能装束にて出演します。

【芸術監督四代目市川猿之助より】



今回、四代目が踊られる演目について見どころをお聞かせください。

『檀垣』は清元節の中でも大曲であり、老女の恋を描いております。なかなか上演する機会もなく、隠れた名作といえるでしょう。今回は、藤間宗家にお勤めいただきます。

『黒塚』は、曾祖父の遺した作品群の代表となる人気演目です。春秋座ならではの企画として、京都の花街で三味線の名手として名高い、今藤美佐緒さんの演奏でお届けいたします。

『悪太郎』はお狂言をもとにつくられた、曾祖父の初期に属する創作舞踊です。初代猿翁のコミカルな面を特色とする振付、日本の曲には珍しいリズムの作曲など、見所満載の喜劇です。

四代目からご覧になって勘十郎さんの振付、踊りの魅

力はどうなところにありますか。

役者の癖や、好み、長所短所を知り尽くした上で振付をなさるスタイルは、そのまま、六代目の御宗家に重なります。お互いの先々代が築いた素晴らしい関係を受け継ぐべく、切磋琢磨、精進を重ねて参りたいと思います。

2016年(松竹大歌舞伎『獨道中五十三驛』)以来4年ぶりの春秋座公演となりますが、京都のファンの皆様にぜひ一言お願いします。

京都は藝処といわれております。しかし、厳しいようですが、それは、昔のイメージであり、残念ながら現実には往時と比べると下火になってしまった印象は否めません。この状況に追い討ちをかけるように、今回のコロナの災い。今は、舞踊会が無事に開催されることを祈るばかりです。



一、
檀垣
榎田治助 作
清元連中

関守の檀垣の老女
実は老女の亡霊
小野小町
四位の少将
藤間勘十郎
中村鷹之資
市川猿之助

二、
玉兔
清元連中

中村鷹之資

三、
黒塚
木村富子 作
四世柗屋佐吉 作曲
長唄囃子連中

老女岩手
三味線
市川猿之助
富川町
今藤美佐緒

四、
悪太郎
猿翁
十種の内
岡村柿紅 作
長唄囃子連中

悪太郎
修行者智蓮坊
太郎冠者
伯父安木松之丞
市川猿之助
藤間勘十郎
中村鷹之資
市川猿弥

長唄 稀音家祐介 社中
清元 清元 菊輔 社中
鳴物 田中傳次郎 社中
箏曲 佐藤 亜美
尺八 佐藤 将山